研　究　紀　要

教　育　相　談　部　会

〔講　演〕
「不登校の現状と支援」　～役割分担によるチーム支援～
こども教育宝仙大学　こども教育学部　教授　石川悦子 …… 1

部　会　の　動　き …… 11

研　究　テ　ー　マ …… 12

紀要編集委員　夏　堀　翔　平（青森県立八戸工業高等学校）

教　育　相　談　部　会

実践発表１

「不登校の現状と支援」　～役割分担によるチーム支援～

こども教育宝仙大学こども教育学部　教授　石川悦子

１　はじめに

（１）　ＶＵＣＡ時代～先行きが不透明で将来の予測が困難な時代～

私は長年スクールカウンセラーとして勤務してきた。今日はその経験のなかからお話をさせていただききたい。現代はＶＵＣＡ時代と言われる。「Ｖ」は変動制（VOLATILITY),「Ｕ」は不確実性（UNCERTAINTY),「Ｃ」は複雑性（COMPLEXITY),「Ａ」は曖昧性（AMBIGUITY)。この言葉は、元々は軍事用語で、その後経済界などで使われてきたが，私たちはこの数年 COVID-19 による世界的パンデミックなど今まで経験したことがないことに直面したので，これからどうなっていくのかという，まさに「ＶＵＣＡ」という言葉がぴったり合うのではないかと思っている。コロナ禍の影響から世の中に閉塞感が漂い，経済問題もあった。教育や子供ということに関すると，家族関係の変化が起きたり，体調が悪かったら子供たち自身や親も学校を休んでもいいとか，価値観や感覚が変わってきたところもある。今世の中としてはだいぶコロナ禍は収束してきたということであるが，その後の影響ということがじわじわと出てくる感じがする。大学生にコロナの中で一番大変なことは何であったか聞くと，いろいろな楽しみにしていた行事がどんどんなくなり，できないままに卒業までいってしまったと言う。遠隔授業なども行い，生徒も先生方もみんなで乗り越えてきたが，いろいろな影響があるのだと思う。ここ数年、大学生が教育現場の実習に行くと，コロナ禍の中で（事前学習が）対面授業ができなかった部分もあるので，態度，対人関係力や交渉力が足りなくて現場で注意を受けたり，大学できちんと指導をしているのか言われたりすることが増えていた。18 歳以上になってもいろいろな影響があるので，まだまだこれから注意深く見ていかなければならない。それは不登校ということにも大きく影響していると思っている。地球温暖化による気候変動，デジタル技術，ＡＩ技術の急激な進化や ChatGPT の出現などにより，子供たちがまた新しい局面に出会う。グローバル経済が引き起こす国際社会の複雑化，キャッシュレス化では，例えば子供たちが親のスマホの暗証番号からどんどん課金をし，何十万円も課金していたという例もある。この辺の駆け引きなどもキャッシュレス化，現金を目の前で見ないといういろいろな影響が出てくる。お金の問題は教育相談に持ち込まれることも多い。不登校の問題やいじめの問題や児童虐待の問題やヤングケアラーの問題や性の問題など，今複雑化，多様化している。学校でも子供たち一人一人にチャンネルを合わせていかないとなかなか難しい時代であるのではないかと思う。

（２）不登校支援に必要な多元的視点

ブロンフェンブレンナーの「生態学的システム理論」では，家族・学校・友達など子供自身の周りでは日々いろいろなことが起きているが，この子への影響というのは，近所や地域などのメゾシステムも影響しているし，さらに親の職場とか親の友人関係とかこの子の兄弟の学校関係とかいろいろなことが影響してきている。まさにコロナの時もそうであり，親の職業が変わる，親の商売が滞り，お店を閉じるなどもあった。それは人災だったり，天災だったり，国家自体，社会全体の状況であった。

【事例】不定愁訴があり，登校渋りが見られる生徒（Ｔ)。コロナ禍により父親が家庭で過ごす時間が増え，Ｔの生活態度を細かく管理するようになった。Ｔと父親との関係は悪化する一方だった。母親は対応に戸惑うも学校に出かけて相談することもできず，気分が落ち込み，妹も学校を休む日が増えてきた。

この事例のように，一人の問題は家族の問題であり，その家族がお互いに影響し合っている。このような場合，父母にも学校に来てもらい，スクールカウンセラーとして親の気持ち，親の困り感，不安，誰にも言えない思いなど，それらを聞いて，一人一人の問題を少しずつ整理していく。すると，家庭の中の雰囲気も変わり，風通しも良くなり，Ｔも登校してくるようになって，今は学校に来ているほうがいいかなということで，登校が安定するようになった。しかし，これを家族だけで支えていこうとすると大変だと思う。担任の先生とも共有しながら，担任もさりげなく声をかけながら支援をしていくということが必要である。

不登校，児童虐待，ヤングケアラー，貧困問題などは，福祉との連携など，多元的にいくつかの角度からアプローチすることが大切である。それだけに，担任や養護教諭が一人で対応することは，時間的にもエネルギー的

にも大変であるので，できるだけチームで役割分担をしながら，力を合わせてやっていくとよい。
　以前は不登校の「対応」という言葉をよく使っていたが，最近は不登校は問題行動ではないという概念で，問題行動調査の表題も変わり，文部科学省も今は「不登校の対応」という言葉は使わなくなり，「支援」という言葉を使っている。今日も「支援」という言葉を使っている。

２　不登校の現状と背景

・子供自身が抱えている課題や問題　　・子供と家庭をめぐる課題や問題
・子供と学校をめぐる課題や問題　　・子供と社会・文化をめぐる問題

　不登校には，子供自身が抱えている課題や問題（対人関係が苦手，集団が苦手，学業に興味が持てない，不本意な入学等）がある一方，子供と家庭をめぐる課題や問題があり，学校になかなか安定的に通えないとか課題を家族関係の中で抱えていたりする。親も心身が不安定な場合もあり，子供時代に虐待やネグレクトをされながら育ってきたという場合もある。子供はそのような中でも意外とたくましく生きているが，そういう積み重ねが心に響いて，辛い状況になっている生徒もいる。体調不良やメンタル不調で受診したい，治療したいと思っている子供がいても，親は，「病院なんて必要ない」，「病院に行って薬とか飲み出したら習慣的になる」，「とにかく甘えなんだから頑張りなさい」，「そんなことを学校で相談するべきじゃない」などと言って，子供はその中で困惑し孤立することもある。それで，かえって親にも言えない，親のことを考えようとすると意識が遠くなるとか気持ちが悪くなる，体調不良になるというような子供もいる。そのような子供と家庭をめぐる問題，それが，幼稚園，小学校，中学校と積み重なってきて，いよいよ思春期の後半になってきて，いろいろなことを頭ではわかってはいるけれども体に出てしまう，頑張らなきゃいけない局面で体調に出てしまう，親になかなか言えないとか理解してもらえないなどという問題もある。また、子供と学校をめぐる課題や問題もあり，学校に合わない，出会った友達とうまくいかない，対人にトラブルがある，先生方とうまくいかない，勉強に対してうまくいかない向き合うことができないなど，学校という場面があるから子供が悩むということもある。もう一つは，多元的で，子供と社会・文化をめぐる課題や問題もある。なんでこんなにたくさんの教科を勉強しなければいけないのかと言う子供もいるし，情報だったらインターネットでとれるのになんで毎日学校に通わなければいけないのかなど，いろいろな価値観をもって発言する生徒もいる。

＜本日後半の演習事例＞不登校生徒B
（文部科学省令和3年度スクールカウンセラー実践活動事例集より抜粋）

- Bは、友人とのトラブルにより、対人不安や被害感が強まり、年度末からクラスや部活動へ行かれなくなった。自傷行為も出現し、不眠や動悸などもあることから、精神科クリニックへの受診が養護教諭より勧められた。
- Bは「自分の人生は、今まですべて親のためにやっていたような気がする」、「そうではなく自分の選んだ人生を生きていきたい」と感じるようになる。
- しかし、「自分が思うように進もうとすると、親が怒るのではないかと思うと怖い」、「こうやって自分をおさえ付けてきた父親を殺してしまうかもしれない」など、家族との葛藤や両親の問題にも気づくようになった。・・・・・・

不登校の背景

- 子供自身
  心身の不調、発達障害、不安、性格、認知（捉え方）、外見や身体等
- 子供と家庭
  貧困、ヤングケアラー（家族の病理）、両親の不和、親自身の問題等
- 子供と学校
  学業、進路、友人関係、教師との関係、部活、いじめ、不適応等
- 子供と社会・文化
  価値観の変化、多様化、取り巻く文化、情報化・・等

　不登校の背景は一つではない。この事例ももちろん生徒自身の心身の不調ということもあるが，子供自身の問題，子供と家庭の問題，子供と学校の問題，子供と社会・文化の問題など，様々な背景が考えられる。生徒自身の対人関係や被害感，自傷行為とか行動に出てしまうこともある。しかしそれは一つの結果であって，それまでの育ちの中で親との関係や葛藤があり，ここからどうやってこれからの人生を生きていこうかという大きな課題に直面している。そのため，高校生くらいになると，受けてきものや育ててきてもらったもの，自我の目覚め，これから自分がどうしていこうかと考える一方，すぐに家を出られるわけでもないので，そのあたりの葛藤や親をどう乗り越えていくかなど，複雑な課題に取り組みながら，身体症状なども出て不登校という形になる。事例の場合は友人とのトラブルもあったのでさらに複雑だが，いくつかの視点で見ていく必要がある。

◇不登校の子供たちの言葉から

- 「できれば、普通に学校に行きたい」「体調さえよければ学校に行けるのに、お腹や頭が痛くなる」
- 「なんで毎日学校に行かなくちゃいけないのか・・・」
- 「自分の居場所がない」「変な目で見られる」⇔（同級生から何気ない悪口を言われた）
- 「学校に近づくと緊張する。黒い塊のようにみえる。落ち着かない」
- 「ちょっと休んでいたら授業が進んでいた。あの宿題を全部終わらせるまでは学校には行けない。行っても仕方がない」
- 「（学校からの）電話には出たくない。何を話していいかわからない」
- 「医者に行ったらすぐによくなると思ったけど、そういうものじゃなかった」

※不登校経験のある大学生 「先生たち、どんな時もずっと心配してくれてたね」
※混沌とした気持ちを行動で示す=ストレスの行動化
例）身体症状症（旧身体表現性障害）

　日頃，スクールカウンセラーとして活動している中で，不登校の子供たちからはいろいろな言葉が聞こえてくる（左スライド参照）。卒業して大学生くらいになって会いに来てくれる生徒と話すと，先生たちがどんなときもずっと心配してくれてたと話す生徒もいる。担任の先生は部活で忙しかったのに，夜に家の近くまで来たからちょっと顔見せてくれと会いに来てく

れて，本当は先生の言葉に応えて，次の日学校に行ければ良かったけど，結局行けなかったけれども，あのときのことは忘れないとか，そういうことは子供たちの心に響いている。自分は（スクールカウンセラーが会いに行った時）髪の毛も伸びてしまっていて渋々出たけれど，先生がすごくうれしそうな顔で自分の顔を見てくれたときに，いろいろなことを感じたとか，先生はうれしくてテンションが上がりそうだったけれど，テンションを上げると自分が引くってわかっているから，先生はすごくテンション抑えていたとか，そんなことを話してくれる大きくなった人たちもいる。だから，そのときはすぐには対応できず，いろいろな働きかけに応えることができなかった生徒たちも，いろいろなことを心の中に積み重ねながら大人になっていくと思っている。また，混沌とした気持ちを行動で示すというストレスの行動化ということはよく言われる。自分のことを自分の言葉で話すということは難しいことで，例えば，今悩んでいるとか，助けてほしいとか，そういうことというのはなかなか言えない。それで，足が痛くなったり，歩けなくなったり，お腹が痛くなってトイレに閉じこもったり，そういういろいろな身体症状に現れる子供もいる。中には自傷行為などもあるし，自殺企図もある。これらの身体症状が出ることを昔は身体表現性障害と言ったが，今は身体症状症と言ったりする。子供たちがなかなか自分のことを自分の言葉で話すことは難しいが，だからといって放っておくことが良いことではなく，どんなふうに支援をしていくかということが大事である。それは、情報提供でもいいかもしれないし，今すぐではなくてもいいけどこういうことだったらできそうかとか，今日できそうなことをやればいいじゃないという言い方かもしれないし，いろいろなアプローチがあると思っている。

◇文部科学省「不登校に関する調査研究協力者会議」から

文部科学省「不登校に関する調査研究協力者会議」から

「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（学校対象）」より

・小・中学校における不登校児童生徒数 244,940 人（前年度 196,127 人）
　出現率：小学生77人に1人、中学生20人に1人、平均39人に1人
・高等学校における不登校生徒数　50,985 人（43,051 人）出現率：約60人に1人

■不登校の要因

小・中学生	高等学校
1.無気力・不安　（小中ともに49.7%）	1.無気力・不安 39.2%
2.生活リズムの乱れ・あそび・非行（小13.0%, 中11.0%）	2.生活リズムの乱れ・あそび・非行 14.9%
3.親子の関わり方（小13.2%, 中 5.5%）	3.入学, 転編入学, 進級時の不適応 9.4%
4.いじめを除く友人関係をめぐる問題（小3.7%, 中11.5%）	4.いじめを除く友人関係をめぐる問題 9.1%
5.学業の不振　（小3.2%、中6.2%）	5.学業の不振 6.2%

「無気力・不安」というものがあまりにも大きい概念なので，ここの質問項目は変えたほうがよいということがいつも会議では議論になっているが，経年調査で行ってきているので，まったくこの項目をなくしてしまうと比較することができなくなってしまうことがある。しかし，「無気力・不安」の中身がもう少し見えるような設問を作ったりすることが必要だろうということは会議でもよく話題になっている。

教育機会確保法ができ，不登校は問題行動ではなく，休むことも大事とか，多様な場所で学ぶことも選択肢としてあるとか，教育機会確保法ができて不登校への考え方が変わったのではないかと言われている。教育機会確保法ができてから不登校が増えたという指摘もあるが，一人一人の大事な子供たちのことなので，どういうふうに支援をし，いろいろなことを伝えられるかということがとても大事だと思っている。

高等学校における長期欠席者数・不登校生徒数

長期欠席者数（前年度）	うち 不登校生徒数（前年度）	不登校生徒の割合（前年度）
118,232 人（80,527 人）	50,985 人（43,051 人）	1.7%　（1.4%）

※不登校の出現率約60名に1人

不登校のうち90 日以上欠席している者	8,948 人（8,455 人）	17.6%（19.6%）
不登校生徒のうち中途退学に至った者	8,940 人（8,480 人）	17.5%（19.7%）
不登校生徒のうち原級留置となった者	3,006 人（3,042 人）	5.9%（ 7.1%）

★高等学校における中途退学者数 38,928 人（前年度 34,965 人）
　在籍生徒数に対する中途退学者の割合 1.2%（前年度 1.1%）・・・出現率98人に1人
★教育機会確保法（義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律）と不登校支援施策

◇「令和２年度不登校児童生徒の実態調査」より

ご参考「令和2年度不登校児童生徒の実態調査」
回答数小学6年生713名, 中学2年生1,303名（令和2年12月実施）

■最初に学校に行きづらいと感じ始めたきっかけ（複数回答）：
「先生のこと」（小学生29.7%, 中学生27.5%）,「身体の不調」（小26.5%, 中32.6%）,「生活リズムの乱れ」（小25.7%, 中25.5%）,「友達のこと」（小25.2%、中25.5%）が上位

■自由記述回答から：「学校の先生に〇〇しなさいと言われることがプレッシャーに感じた」「勉強についていかれない」「発達障害や性の多様性に関する理解がたりない」「先生が怖かった」等

■学校を休んでいる間の気持ち（複数回答）：
「ほっとした・楽な気持ちだった」　（小69.7%, 中69.2%）
「勉強の遅れに対する不安があった」（小63.8%, 中74.2%）
「進路・進学に対する不安があった」（小47.0%, 中69.2%）
「学校の同級生がどう思っているか不安だった」（小64.4%, 中71.6%）

➡不登校の要因や背景、その受け止め方が個々の状況によって多様であり、支援ニーズも多岐にわたる。チーム対応の必要性へ

➡COCOLOプラン（R5年3月）学びの場の確保、SOSを見逃さない、学級風土の見える化

参考までに，小・中学校の実態調査の結果を紹介する。生徒自身が答えたこの調査では，最初に学校に行きづらいと感じ始めたきっかけは，「無気力・不安」ということではなくて，「先生のこと」が約30%，「身体の不調」が約 30%，「生活リズムの乱れ」が約 25%，「友達のこと」が約 25%という結果になっている。複数回答であるため複合的な要因があるとは思うが，「無気力・不安」よりはずっと見えやすい結果にはなっている。自由記述回答から，「学校の先生に〇〇しなさいと言われていることがプレ

ッシャーに感じた」「勉強についていかれない」「発達障害や性の多様性に関する理解がたりない」「先生が怖かった」という意見があった。今年文科省の委託調査研究で，自由記述の分析ということが行われているので，もっといろいろなことが分析されて，子供たちの生の声がどういうものなのか出てくると思う。「先生が怖かった」と書かれると，先生方としてもこれだけ丁寧な関わりをしているのにとか，どういう言い方をすればよかったのかとか，すごく迷い悩むと言う先生方もいる。ただし，不登校というのは，その時の子供の状況，物事の受け取り方など，本当に多様である。だから，先生が発言している，子供たちを励ましている言葉が，ほかの子供には怖くもなんともないけれども，ある子供にとっては非常にその励ましが怖かったということもあるので，あまり自信を失ったりはしないでほしい。ただ，子供の方も多様であり，支援のニーズも多様なので，チームで取り組むとか複数の先生方が対応していくことが必要である。学校を休んでいる間の気持ちとしては，「ほっとした・楽な気持だった」が約 70%，「勉強の遅れに対する不安があった」は小学校より中学校が多く 74%，「進路・進学に対する不安があった」も中学校が多く約 70%，「学校の同級生がどう思っているか不安だった」も中学生が多い。小学生よりも中学生の方がこういうものに対しては強いので，ますます年齢が上がれば，いろいろなものに対して遅れるとか，今後自分がどういう進学とか進路を考えればいいのかとか，高校生であればますます自分の問題として深刻に考えているんだと思う。高校の場合は義務教育ではないので，子供たちに選ぶ権利もあるし，いろいろな進路があるんじゃないかとか，どこまで支援をしたほうがいいかとか，どこまで支援をして今の高校につなぎとめておくということがこの子にとって重要なのかとか，その辺は先生方の間でもいろいろ議論が分かれたりすることもあると思う。いろいろ意見は分かれると思うが，いろいろな意見があっていいと思う。

◇ＣＯＣＯＬＯプラン（２０２３年３月）

１．不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し，学びたいと思った時に学べる環境を整える

〇不登校特例校の設置促進　　300 校設置を目指す，名称の検討

〇校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム等）の設置促進
　　落ち着いた空間で学習・生活できる環境を学校内に設置

〇教育支援センターの機能強化　　業務委託等を通して NPO やフリースクール等との連携を強化
　　オンラインによる広域支援

〇高等学校等における柔軟で質の高い学びの保障

〇多様な学びの場、居場所の確保　　こども家庭庁とも連携

２．心の小さな SOS を見逃さず，「チーム学校」で支援する

不登校になる前に，「チーム学校」による支援を実施するため１人１台端末を活用し，小さな SOS に早期に気付くことができるようにするとともに，不登校の保護者も支援。

〇１人１台端末を活用し，心や体調の変化の早期発見を推進（健康観察に ICT 活用）

〇「チーム学校」による早期支援(教師やスクールカウンセラー，スクールソーシャルワーカー，養護教諭等が専門性を発揮して連携。こども家庭庁とも連携しつつ，福祉部局と教育委員会の連携を強化)

〇一人で悩みを抱え込まないよう保護者を支援（相談窓口整備。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが保護者を支援）

３．学校の風土の「見える化」を通して，学校を「みんなが安心して学べる」場所にする

〇学校の風土を「見える化」して，関係者が共通認識を持って取り組めるようにし学校を安心して学べる場所に

〇学校の風土を「見える化」(風土等を把握するためのツールを整理し，全国へ提示)

〇学校で過ごす時間の中で最も長い「授業」を改善（子供たちの特性に合った柔軟な学びを実現）

〇いじめ等の問題行動に対する毅然とした対応の徹底

〇生徒が主体的に参画した校則等の見直しの推進

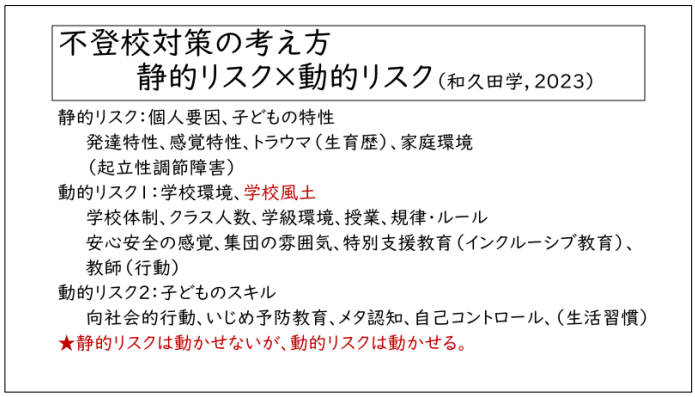
〇快適で温かみのある学校環境整備

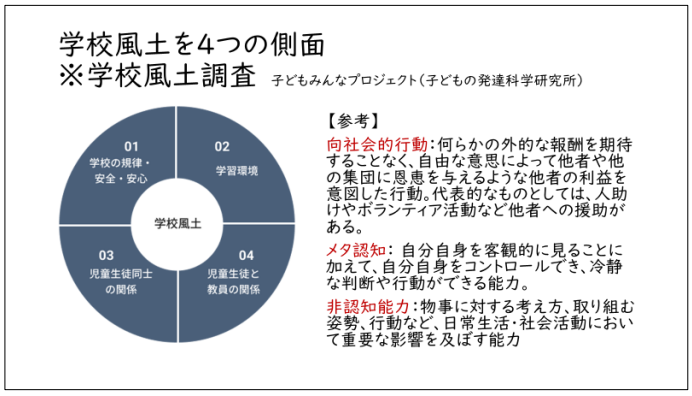
〇学校を，障害や国籍言語等の違いに関わらず，共生社会を学ぶ場に

〈講師から質問〉ICT は進んでいるが，１人１台端末を生徒の心の状態や様子などをキャッチすることに使うとか，早期発見していくとか，いろいろな可能性はあると思うが，どうか?

（生徒指導支援 G 直町副参事）青森県は県立学校にはタブレットをすべて配布しており，生徒の検索するワードで，例えば「死にたい」とか「家から出たい」とか，そういったワードを検索した場合にその検索履歴が県教育委員会に来ることになっている。県教育委員会としては学校に情報提供して，学校に対応をお願いしている。

SOS を見逃さないための特別な取り組みということではないが，生徒の検索したワードによっては教育委員会から学校へということで，支援をお願いしているというような取り組みにはなっている。
（講師）生徒は特定できるのか？
（生徒指導支援 G 直町副参事）生徒はそれぞれ ID があるので，どの端末からどういうワードで検索したかわかるようにはなっている。そこから学校では生徒を特定して支援するという形になっている。
（講師）そうやって特定できるということはいいですね。それが一件でも二件でも生徒の支援につながったらいいなというふうに思う。一昨年，都立高校で心の天気予報という感じで，今日はどしゃぶりとかくもりとかを選べるようにして，相談したくなったということもわかるように，とにかく毎日つけさせようということを業者を入れて実施した。６校でやってみたが，情報を見た担任の先生がすぐに対応することや，学校の中の意識が同じような温度感になっていくことが難しく，今少しずつ進めているところである。



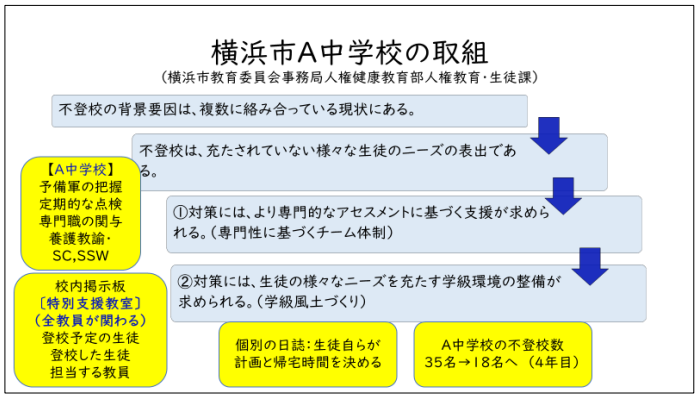


不登校対策の考え方として，静的リスクと動的リスクがある。静的リスク（なかなか動かすことのできないリスク）というのは，個人要因とか子供の特性ということである。その子供自身の発達特性，感覚特性，トラウマ（生育歴），家庭環境等は，なかなか動かすことができない。今，起立性調節障害などから不登校になる生徒も大変多いが，統計によると 15 歳から 18 歳の子供は 10%くらいに起立性調節障害があるという調査もある。中・重度になると，朝起きられないとかがあるので不登校になる。これら静的リスクをきちんとアセスメントし，認めておくことも大切である。一方で，動的リスクはある程度動かしたり，変えたりすることができる。そのかけ算のところで，不登校をある程度改善していくことはできるという考え方である。

子どもの発達科学研究所というところで，学校風土調査というものを開発して行っている。１．学校の規律・安全・安心，２．学習環境，３．児童生徒同士の関係，４．児童生徒と教員の関係，この１～４を調整して，学級風土が変わることによって，もともと少し集団が苦手な子供でも、また学校に適応することができるというものである。意識的に学級風土に働きかけていく，学校自体がそこを見直していく必要があるという調査結果になっている。

向社会的行動，メタ認知，非認知能力（スライド参照）。生徒といろいろな話をすることによって，生徒は視野が変わってきたりする。いろいろな意味で自分自身を俯瞰して見ることができるようになると良い。メタ認知は大事で，育てていくことや気付かせていくことができる。非認知能力は，誰かと協力し合える，ちょっと困ったら誰かに相談できる，嫌だなと思ったらそれ嫌ですと言える，その言葉に自分は傷ついたというふうに言える，対人関係力などということである。非認知能力は幼児期に育てるものとか言われたりもするが，幼児期に育たなくても，協調性や交渉力が中学校・高校・大学でも，社会人になってからでも，いろいろ気付いたり，少し自分が半歩出られるようなスキルを身に付ければ，十分身に付いていくと思うので，そのあたりは一つの教育相談として大事なことだと思う。このように，見方を変えるとか認知を広げるなど生徒自身を育てていく部分と環境調整の部分において，なかなかその人の基本的な部分，静的リスクは変えられないかもしれないけれども，だいぶ不登校というのは形が変わってくることもある。また、不登校だけではなくて，子供自身の援助希救力だとか人間関係力とかそういうことにも影響していくし，さらに社会に出たときにもそういう力がつくと考える。

「生徒指導提要」が改定になり，何か起きた時のリアクティブ，事後対応ではなくて，プロアクティブ，事前の先手型の活動をしていく，発達支持的生徒指導というのが大事である。ここをどういうふうに日頃から展開していくかということで，向社会的行動やメタ認知などもそこに該当する。

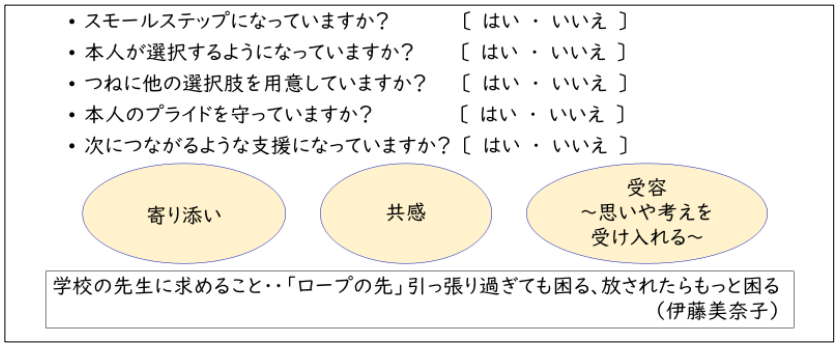


横浜市の中学校で，校長のリーダーシップのもとで，学校の中に不登校のための支援学級（特別支援教室）を作った試みがある。中学校では，何か集団の中で不適応や不安を抱えている人など予備軍はいないかなどの調査をし，常に養護教諭や担任等で複数で話し合いをする。登校が不安定になった生徒たちは，特別支援教室というところに通うことができる。そこは担当の先生を付けるというよりは，全員の先生が担当する。今日は誰々が来ていると掲示板に書いて，誰々が来てるというような感じでどんどん先生たちが関わるという形である。生徒は特別支援教室に入った場合には，個別の日誌とか，生徒自らが計画と帰宅時間を決めるとかを自律的に行う。こういう取り組みを学校が一丸となってやったということの中で，不登校が４年目になるとだいぶ半減したという取り組みである。

また，東京都の事例だが，東京都はいじめや学校が変わった時のなかなか落ち着かない環境に対応するため，小学校５年生，中学校１年生，高校１年生にスクールカウンセラーが一人一人面接をするということを平成 26 年から取り入れて今も行っている。これも先手的，予防的ということだと思うが，行った時の初年度と翌年を比べると，全員面接により生徒からの訴えが増えたということで，生徒が言えるようになったということであればそれでいいと思う。表出できるようになるということの実感が学校にあったのだとすれば，それはそれでとても良かった。全員面接でいじめやいじめの疑いを発見することができた。先生方と打ち合わせをして，簡単な事前アンケートをするのだが，このアンケートで，今学校で困っていることはありますかとか，体調はどうですかとか，眠れないことがありますかとか，15 項目くらいのアンケートを取っておいて，それを使いながら，全員面接をする。児童・生徒のつながりの構築とか，「相談すること」への抵抗感の軽減と相談しやすい環境の整備，児童・生徒理解及び実態把握ということにつながる。

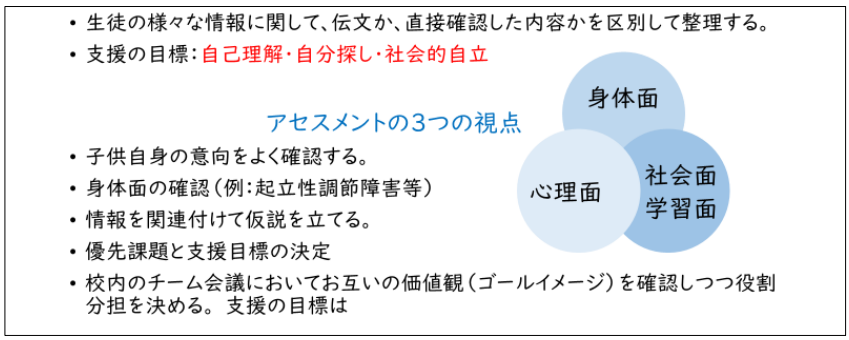
３　不登校への支援　登校渋りへの初期支援

◇不登校支援を振り返って



不登校支援を振り返ってみる。少し抽象的な言い方にはなっているが，点検していただけたらなと思う。寄り添いながら，共感しながら，本人が言いたいことを最後まで聞いて，そしてじゃあどうしたいのか，どんなことならできるのかというところを一緒に考えていくような取り組み，支援が大事である。

◇支援のための情報収集（アセスメント）



不登校あるいは登校渋りが起きたら，この子にはどういうことが起きているのか，どんなことが複合的に重なっているのかということをアセスメントすることが大事である。アセスメントの観点は，まず身体面（起立性調節障害や腹痛等，運動が苦手とか疲れやすい，過呼吸になりやすいなど），心理面（性格，対人への不安とか緊張しやすいとか抱え

込みやすいなど），社会面・学習面（学校の友達とどうか，クラスの適応状況，勉強の状況，進路とか将来をどのように捉えているか，目標があるかなど）がある。このように身体，心理，社会・学習というようなところから少し見立てていくと良い。

例えば，不登校状態にあるH子の事例であるが，アセスメントを身体面と心理面と社会面からマップにしたものである（スライド省略）。こういうふうに整理していかないと，チームで対応する，複数の先生で対応するときに，情報が混乱し，なんとなく受け止め方が違っていることもあるので，このように１枚シートでもいいので，整理しておくと便利である。簡単なシートだが，こんなふうにして少しアセスメントをしていくと，どこの部分を誰が担当していけるか，どこを優先的にやっていくかなど，少し見えてくるところがある。

◇個々の不登校をどう理解するか

【早期対応のポイント】　「サイン」と「意味」の理解

１．危機のサインに気づく。

２．その子供にとって，どのような必要性で不登校になっているのかを理解し把握する。

・いじめからの回避　　・居心地が悪くて息苦しい。

・これまでの生育上欠けていたものを取り戻したい。　　・親や先生に自分の存在を認めさせたい。

【さまざまなタイプ】

不安が強いタイプ　　生活リズムの乱れ・遊び・非行タイプ

幼い面があり無気力にみえるタイプ　　発達障害が疑われるタイプ

◇本人の支援のポイント

・人生の中で，その子供にとって必要な「自分崩しと自分育て」に苦しみながら取り組んでいると捉える。責めたり叱ったりせず関係作りから始める。

・学校復帰にこだわり過ぎず，「将来の社会復帰」「自律・自立」「自分探し」を支援する。

・アセスメントを行う。学校生活や社会参加への手掛かりを提供する。

・電話や面談では，身体の具合や家でどんな風に過ごしているかなど日常生活に関わるさり気ない会話から始める。徐々に気持ちや希望を聴く。

・教員等による家庭訪問は本人の了解を得てからにする。10 分程度の短時間で切り上げる。

・本人の希望があれば，級友を迎えに行かせる。

・時期をみて他機関の情報を提供する。

・本生徒に関わる具体的なことを話題にしてから会話を始める。例）「去年は，〇〇委員で頑張っていたな」「先週は遅刻も減ってがんばっているじゃないか」等

・子供の話を最後まで聴く。無口な場合は筆談もあり。

例「面倒くさいから，いい」と話したがらない生徒への対応

➡この表現の陰に強い葛藤や周囲（特に家族）に対する不信，絶望が隠れている場合がある。「話すのも大変なんだろうけど，心配だからまた話に来てほしい。〇曜日の放課後はどうか？」と本人の話に関心があることをはっきりと伝える。

・質問を上手に使う。

開かれた質問　例）「～はどうだったか？」「どう思ったか？」

閉じられた質問　例）「〇〇はできたのか？」「テスト対策で困っていることはあるか？」

話を聴く際の座り方は，45 度の方が話しやすいとよく言われるが，45 度はわざとらしいと感じる子供もいるので，生徒に選ばせて良いと思う。時々，横に来る生徒もいる。ある程度自由にしたほうが良い。座席は４個くらい用意しておいて，どこにでも座れる感じにすると良い。

◇「きく態度」のポイント

【話し手のニーズ（要求、必要）は？】

・きちんと話を受け止めてほしい。

・話の内容だけでなく，感情も理解してほしい。

・一方的に非難されたり，責められたくない。

・一人の個別的な人として丁寧に対応してほしい。

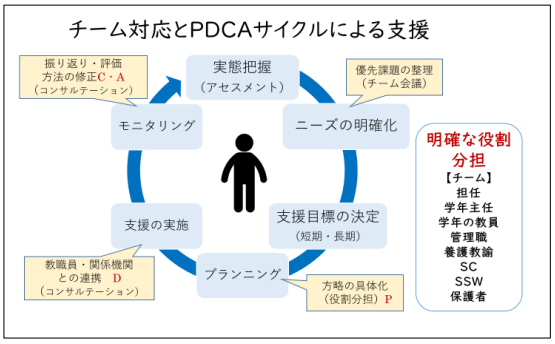
・秘密は守ってほしい。
・裏表のない誠実な態度で接してほしい。
　⇒信頼関係は，相手の話をよく聴き，受け止めることから始まる。
　⇒肯定的関心（受容），共感的態度，自己一致（裏表のない態度）

3つのきく
聞く
聴く
訊く

３つの「聞く」「聴く」「訊く」だが，「聴く」は「傾聴」。「訊く」は，上手に質問するということである。質問することはその人の話をちゃんと聞いていないと質問できないし，言いたいことはこういうことかなというふうに話の明確化，整理につながるので，このうまく質問するということは面接のコツである。特に保護者は話があちこちに飛ぶことがあるので，うまく質問するということは大事である。

◇保護者支援のポイント　～連携が難しい親ほど、実はご自身が困っている～
・保護者と継続的に連絡を取り合い，「一緒に考えて行きましょう」と声かけをする。
・保護者の不安，孤独，自信のなさを受け止める。親の苦悩を労う。
・保護者の希望や意思を確認しながら，スクールカウンセラー等を紹介する。
・親を責めない。親自身の学校体験がマイナスイメージのこともある。
・子供が安心して過ごせる環境づくりを一緒に考える。段階に応じて関係機関等の情報提供をする。
・学校への具体的な協力（例：定期面談・連絡）を提案する。学年便りや行事予定表を渡す。
・親の気持ち（心配）と子供本人の気持ちを混同して押し付けないよう助言する。

◇スクールカウンセラーとの連携
＜教員➡SC＞
・学級担任として何が気になっているのかを伝える。
・これまでどのような支援をしてきたのかを簡潔に伝える。
・学校として SC に何を望んでいるのか。「とりあえず SC と面接」は NG
　例「保護者の心の安定を図りたいから」「専門機関につなぐ必要があるかどうか見立てて欲しいから 」
・子供や保護者に約束した内容を SC にあらかじめ伝えておくことで，ＳＣと子供や保護者との信頼関係づくりにつながる。
＜SC➡教員＞
・生徒の状況や必要な支援について見立てて説明する。
・生徒や保護者との面談で得た情報で，その後の支援に必要な情報を積極的に提供する。
・支援者の１人として役割を分担する（チームの構築）。

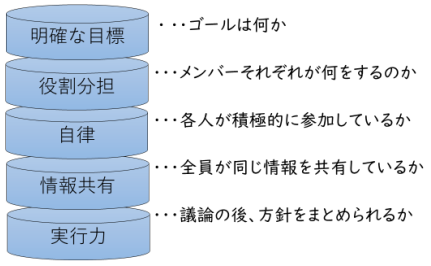


◇校内体制の課題と解決策

・迅速で実効性のある情報共有ができていますか？
・担任を支えるチーム体制が充実していますか？
・会議が報告だけで終わってしまう傾向はありませんか？
・報告･連絡･相談が十分に機能していますか？
・各校のいじめ防止対策が生徒や保護者に伝わっていますか？

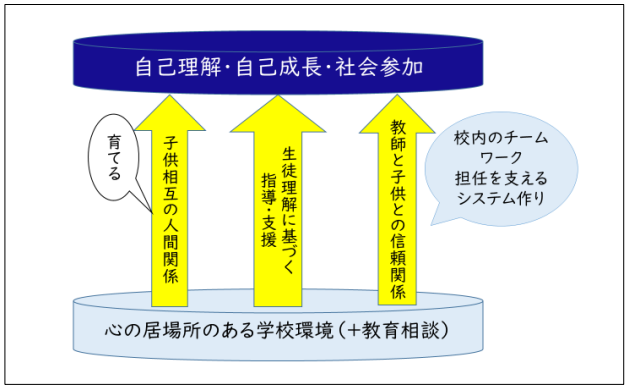
1. 生徒の情報を共有する場、共通認識を図る場を意識的に作る。
2. 対応や対策について具体的に協議する場を確保する。
3. 報告･連絡･相談を徹底する。
◇ 授業や教育活動を通した未然防止への取り組み

チームの構成
『チームワークの心理学』山口裕幸（2008）



クラスの雰囲気が悪ければクラスの雰囲気も変えていく指導をして，みんなの問題として，良いクラスにして

いくとか，雰囲気の良いクラスにしていくということはどういうことかということを考えさせるなども大事である。



一人一人の心の居場所のある学校環境と教育相談があり，子供相互の人間関係は大事で，生徒理解に基づく指導・支援も大事，教師と子供との信頼関係も大事である。ただ多様化，複雑化しているので，担任の先生を支えるチームワークづくりということも大事である。子供相互のという意味では，メタ認知や非認知能力などの子供の力をつけていく。静的なものは変えられないが，これからつくスキルを育てていき，そういう中で自己理解・自己成長・社会参加が進んでいくと，ひいては不登校ではなく，学校に来られるということもあるし，また次のステップで成長していくということもあるし，もし次の段階を選んだとしてもそこで適応していくということも大いにあるので，中長期的なことを考えた上での支援も必要である。

４　演習

＜演習１＞　不登校生徒Ａ

「あなたが，生徒Ａの担任教諭であるとしたら，どのように取り組んでいきますか。まずは設問に従って自分の考えを書き，次のグループ協議へつなげてください。」

- Ａは，高校入学以来どちらかというと幼い印象で，はしゃぎおどける姿が印象に残る生徒であった。少々いじられキャラのような面もあった。
- 身長は高い方でバスケット部に仮入部したが，本人にとっては練習がきつかったようで正式入部はしなかった。
- ６月頃より，電車通学の途中で吐き気を覚えることが多くなり，自転車通学に切り替えたが，それでも朝から吐き気に襲われる日が多くなった。そういう時は本人が母親に電話をかけ，励ましを受けて登校を続けていたが，７月には教室内でも「気持ち悪い，吐き気がする」と訴えるようになり，保健室利用が増えてきた。そしてそのまま早退することが増え，最近は週に２－３日は欠席するようになっている。
- 近医を受診すると抗不安薬が処方されたが，症状が改善する様子がみられない。
- ２学期の始業式には登校するも，やはり悪心を訴えて早退した。その後，５時間目から登校することもあるが，９月も登校は安定しない状況が続いている。

〈以下は各グループの発表内容〉

【１．アセスメント】

１－１．Ａについてもっと知りたい情報にはどのようなものがありますか。

家庭状況（様子，連絡先など），学習状況（欠課時数，特定の曜日や授業の有無など），身体状況（いつから，通院先など），友人・クラスの状況（いじられ，またはいじめの可能性），入学前の様子（中学，不本意入学など），趣味，適応できる状況・場面，本人の受け止め方

【２．支援】

２－１．Ａへの支援としてどのようなことをしていきますか。

本人との面談（担任，部活顧問，ＳＣなど），本人の居場所確保，学習面のケア（ＩＣＴ活用等），今後の意向や希望，信頼関係づくり（交換ノートなど）

２－２．保護者との連携はどのように図っていきますか。

訪問，担当決め，家庭と情報交換，情報共有，保護者の望むこと，ＳＣ・ＳＳＷを勧める，家庭でのＡへの接し方，親の見立て，子どもから聞いた学校の話

２－３．担任として，組織的対応（チーム）や全体の配慮にどのようにつなげていきますか。

学年，養護教諭，全教員，ＳＣ，ＳＳＷ，Ｄｒ．との協力関係，級友への働きかけ，Ａと合う先生，Ａの希望や意向，ケース会議，教育相談・特別支援委員会，学習支援

〈石川先生のコメント〉

◇アセスメント

・表面上「いじられ」であっても，「いじめ」または，本人にとって辛いことがあった，という視点をもつことが大切である。

・なぜバスケ部を選んだのか，なぜ本入部しなかったのかなど，もう一歩踏み込んで尋ねると本人の思いに近づけることもある。

◇組織的対応

・部活動や趣味に加えて，何の教科が好きかを話題にしてもよい。話しやすい先生がわかるとチーム支援体制に繋がる。

◇Ａへの支援

・本人の意向を大切にする。

・体調が悪くなるときは，本人もどうしたらよいかわからない。身体症状が出ているときは積極的に医療と連携をとる。

◇医療との連携

・本人・保護者の了承を得て，学校のどの場面で困っているかなどの様子を医者に情報を提供し（校長、教頭、ＳＣ、３名ほどの連名で「情報提供書」を作成する)，医者の所見をもとに，どのような配慮が必要かを具体的に聞く。

・一定のルールのもと，保健室などの逃げ場所を利用してもよい。

◇保護者との連携

・学校へどんな気持ちで入学したのか家族にしかわからない情報を得る。

・いつ，どのような症状がでるかなど，身体症状について具体的にきく。効果的な対処方も聞いておく。

部　会　の　動　き

自　令和５年４月
至　令和６年３月

令和５年　６月１２日　令和５年度第１回役員会　　オンライン開催
　　９月　６日　令和５年度第２回役員会　　オンライン開催

第37回　研 究 大 会 講 座 一 覧

	講　　演
テ　ー　マ	「不登校の現状と支援」
講　　師	こども教育宝仙大学　こども教育学部　　教授　石川悦子
記　録　者	青森県立五所川原高等学校　　相馬　容子　　池田　順子

研　究　テ　ー　マ

紀要(集)	年度	研　究　テ　ー　マ	会　場	会員数(一・二希望)計	大会参加数	大会発表者数
56	23	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 … あたたかいかかわりづくりのために … ○「不登校と発達障害」	青森県総合社会教育センター	124	54	1
57	24	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 … あたたかいかかわりづくりのために … ○「生徒指導コーディネーターとしての教育相談担当者の今後の役割」	青森県総合社会教育センター	135	56	1
58	25	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 … あたたかいかかわりづくりのために … ○「子どもたちの命を守る」	青森県立図書館	132	76	1
59	26	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「誰もが行きたくなる学校を創る」 - 生徒指導・教育相談・特別支援をデザインする -	青森県立図書館	102	55	1
60	27	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「学校現場における学級集団づくりの在り方 ～Ｑ－Ｕを活用した学級づくり～」	青森中央学院大学	127	72	1
61	28	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「インクルーシブな高校づくりの起点 ～教育相談の在り方を考える～」	アピオあおもり	134	65	0
62	29	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「家族の問題解決」	アピオあおもり	147	69	0
63	30	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「関係力を磨くGWTのすすめ！」	アピオあおもり	133	65	0
64	31 令和元	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「教育相談・学級経営に活かすｸﾞﾙｰﾌﾟｱﾌﾟﾛｰﾁ」	青森県総合社会教育センター	147	76	0
66	4	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「チーム学校」の構築	青森県総合社会教育センター	128	63	0
67	5	テーマ「教育相談の普及と定着を求めて」 …あたたかいかかわりづくりのために… ○「不登校の現状と支援」	青森県総合社会教育センター	126	61	0